（第６回日本土木史研究発表会論文集　1986年６月）

明治初期の農村集落の小規模土木構造物について

―神奈川県旧久末村を事例として―

茨城大学　正会員　笹谷　康之

Small Scale Structures at a Settlement in the Early Age of Meiji

by Y.Sasatani

概　要

従来、歴史研究において、農村集落内の小規模土木構造物について研究した例は極めて少ない。そこで、本研究では、下末吉台地縁辺部に位置する旧久末村を事例に、「久末村地引絵図」、久末村の「村内地理全誌」等から、明治初期の道路、河川、水路、土手、橋梁、堰等の実態を調べ、それらと土地利用との関係、それらが構成する農村空間の特色を報告するものである。この結果、道路、河川、水路、田、畑、宅地、山林、藪、萱野、寺、神社などの面積を定量的に把促するとともに、その地形立地を示した。また、橋梁と堰の維持管理について言及するとともに、久末村における１２の特徴的な空間構成タイプを抽出した。（明治初期、農村集落、小規模土木構造物）

１．はじめに

この二、三十年、日本の農村は、かつて経験したことがないほど大きな変容をとげた。ついこの間まで、アスファルトで舗装された小路は全くと言ってよいほどなかった。圃場整備が行なわれる前の細い畔道は、くねくねと曲がっていたし、ネコの額ほどのちまちました田圃の横を小さな水路が清流をたたえていた。

農薬によって小動物が大量虐殺される前、そんな水路でメダカをとり、土手に出ては網を一振りしただけで十数匹のモンシロチョウを取ったし、樹園に入りこんでは素手で何十匹ものアブラゼミが取れた。物質的に貧しかったことは事実だが、そこには地域住民によって使いながら守り、守りながら使ってきた「土」と「木」を材料とした微細な土木構造物が、みごとなモザイクを形成していた。風土になじんだ美しい農村景観があったのである。高度経済成長が始まり、柳田国男が描き出した民俗学の舞台が崩壊するまでは、日本の農村は大なり小なりこのような姿をしてたのである。

ところが、従来の歴史研究のなかでは、そのような人々の生活舞台を構成している農村の微細な土木構造物の立地、分布、建設、維持管理に関する研究は、ほとんどみられなかった。古代や中世では、考古学、歴史地理学などの分野で研究が進み、当時の農村の生活環境、生産条件が徐々に解明されつつあるが、史料が豊富に残っている近世、近代では、そのような研究がほとんど見受けられないのが実状である。道を例に取るならば，近世史学者である木村礎は、「道の研究の大部分は、古代の官道や中世の鎌倉道、近世の五街道や脇往還を対象としており、村の中の道といった観点はほとんどなかった。もちろん道には遠隔地間を結ぶという機能があり、そのことの持つ意味は大きいが、一般庶民の日常生活にとっての道は、多くの場合、官道や街道ではなく、村の中の道や隣村への道、精々市場・町場への道であった。こうしたいわば日常的な道についての研究がほとんどないのは、これまでの道研究の大きな欠陥である。」[1]と論じている。そしてさらに「日本民俗学はいわゆる歴史研究が見落としてきたものを「発見」し、日本社会の基底をさまざまな形で問うてきた。その民俗学すらも、村の中の小道についての正面きった問題提起は行っていないように見える。柳田国男編『山の研究』は村についての広汎な問題提起であって、現在でも学ぶべきことが多く、‥‥

（中略）‥‥。しかしここにおいてすら、村の中の小道や橋についての関心はなかったようである。」[2)]と民俗学研究の欠点を示している。

一方、地理学においては昭和初期、景観地理学、集落地理学と呼ばれる分野が隆盛を極め、農村集落の立地や環境条件が細かく記述されてきたが、以後そのような研究は衰退し、今日にいたっているのが現状である。

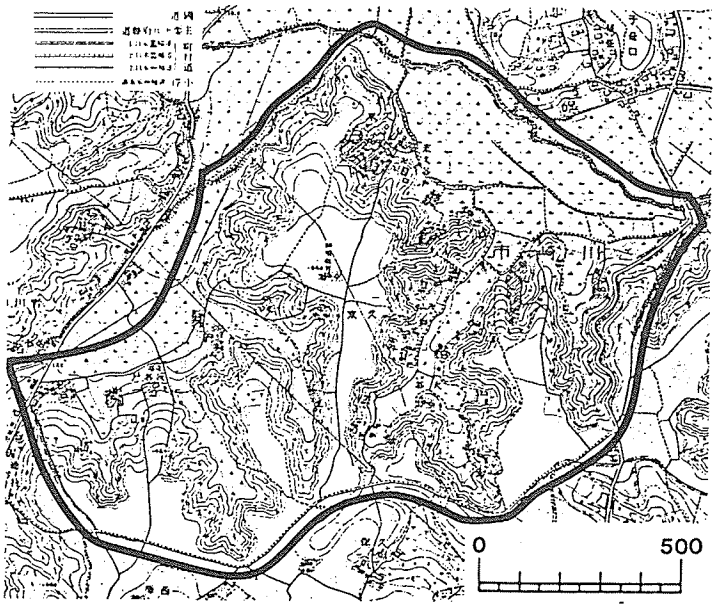
そこで、従来の農村の微細な環境条件を明らかにするための第一歩として、本研究では、下末吉台地の縁辺部に位置する旧久末村（川崎市高津区）を対象に、明治初期の村内に存在する小規模な道路、橋梁、河川、水路、土手等の土木構造物の実状を調べ、それらと土地利用との関係、それらが構成する空間の特徴を報告するものである。

久末村を事例として選んだのは、地租改正時に比較的正確に測量された「久末村地引絵図」１８７４（明治７）年、（以下「絵図」とする）が現存すること、著述に熱心で一日中机に向かっていたと言われている石井茂左衛門氏が残した「村内地理全誌」[3)]１８７６（明治９）年、（以下「全誌」とする）が存在することより、明治初期の土地利用、土木構造物の分布が正確に把捉できるからである。よって、上記２点の史料をもとに、「１／１００００の地形図」１９３９（昭和１４）年、「空中写真」１９４８（昭和２３）年を比較し考証していく。

２．土地利用

久末村は、図１のように、南部には下末吉台地が、北部には多摩川低地が位置し、南部から北部に向かって数本の舌状台地が展開している。舌状台地の間には谷戸と呼ばれる小谷が複雑に入り込んでおり、台地と低地の比高は３５ｍに達する。集落形態は、宅地が散在する散居集落（散村とも言う）である。村の面積は１１６町２反で、地形図から計測した面積１３０haに比べるとやや小さな値になっている。これは税金である地租を低くおさえるために、地価の基準となる面積を低めに申告したためと考えられる。

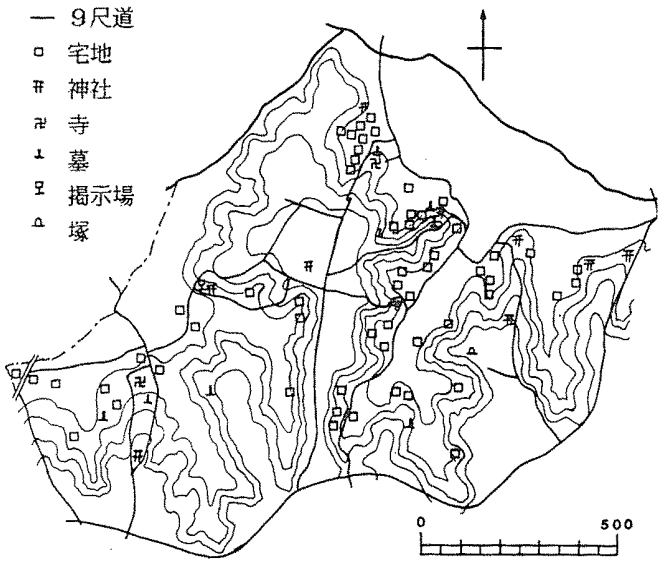
土地利用面積を、表１に示す。これによると、山林、畑、田の占める割合が大きいことがわかる。「絵図」と比較すると、主に、低地は田に、斜面は山林に、台地面は畑に利用されていることがわかる。また、２種類の谷戸（小谷）があって、小規模な３ヵ所の谷戸は、谷底を畑、宅地、宅地の周囲に存在する藪によって占有されている。一方、５ヵ所の大きい谷戸では谷底を田が占有しており、その周囲の緩斜面を畑、宅地、藪が占有している。宅地の大半は日陰斜面に立地することになり、１日の日照時間が少ない。水利に適した有効な低地を田に、平坦な台地面を畑に利用して、残った土地で水の得えやすい崖下を、宅地に占地せざるを得なかったためと考えられる。このため宅地が分散し、散居集落が形成されたのであろう。萱野は、谷戸、あるいは谷戸より小さな小谷の谷頭部に立地している。以上のように、主要な土地利用の地目は、地形ときわめて密接に対応していることがわかる。



図－１　地形図（昭和１４年）

図2に示すように、寺は2ヵ所、神社（地目が神社となっていない小祠を除く）は10ヵ所存在する。このうち2ヵ所の寺、7ヵ所の神社は、すべて尾根の先端部に位置し、周囲の低地、谷底から目立ちやすい場所を占めている。また、2ヵ所の神社は尾根の肩（尾根線と凸型傾斜変換線の交点）に存在しているし、残り1ヵ所の神社は、村内中央の台地上に立地している。

いずれも、地形の特徴をとらえ、その凸部を占地していることがわかる。塚は、台地上に1ヵ所、掲示場は村内中央やや西側の9尺道の三っ辻にある。墓は、計8ヵ所存在する。この内、寺に近接して尾根上に2ヵ所、尾根先端部に1ヵ所、尾根の肩に1ヵ所、台地崖下に3ヵ所、谷頭に1ヵ所立地している。墓は、いずれも背後を山林に囲まれている。



図ー2　宅地、社寺、墓、掲示場、塚の分布

表ー1　土地利用面積

地目	町	反	畝	歩	割合
田	24	4	9	22	21、1%
田畔	2	5	1	16	2、2%
畑	29	6	9	20	25、6%
畑畔	1	7	0	0	1、5%
宅地	4	4	4	0	3、8%
山林	40	0	7	4	34、5%
藪	1	9	7	11	1、7%
萱野	3	1	3	20	2、7%
道路	5	4	0	27	4、7%
水路、河川	1	0	4	20	0、9%
土手		6	9	18	0、6%
神社		8	8	22	0、8%
墓		1	1	24	0、1%
掲示場				11	0、0%
塚			1	22	0、0%
計	116	2	0	27	

2ケ所の小規模な墓地の面積は反別が不明だったので表に含めていない。

3．線状構造物の分布

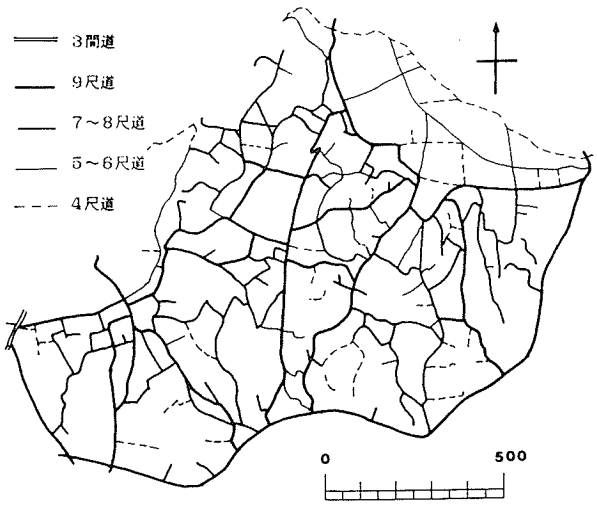
道路、河川、水路、土手について幅員別に延長距離を求めると、表2のようになった。これらについて、1haあたりの延長密度、及び誘致距離を、表3にまとめた。

3間幅の広幅員道路は、村内西端をかすめて通る中原街道だけである。9尺道は、村内の幹線網を形成する道路であり、南北方向に神奈川道が4本、東西方向に川崎道が1本、寺の参道が1本、その他は村道と呼ばれる道路で構成されている。神奈川道は神奈川へ、川崎道は川崎へ通じる道路と考えられる。うち1本の神奈川道は東側の、川崎道は南側の村境となっている。7尺道は、9尺道を連絡する補助道路網を形成している。それと共に、萱野へ続く行き止まりの道の多くが7尺道である。いずれも山林の中を通る道である。これに対して6尺道、4尺道は田、畑の中を通る場合が多い。

図3と図1を比較してみると、図3の道路網の方が細かいことがわかる。地図の作成時期に65年の開きはあるが、現実には1／10000の地形図に乗っていない道が数多くあるためであろう。ところで1939（昭和14）年に測量された図1では、図3にみられる9尺道（約2．7m）はおおむね記載されているが、その多くが1m以上2m未満の道路として表されている。なかには1m以下の道路とされている例もある。道路網の変化がほとんどないと予想されることから、図3の道路は現実には表示幅より幅員が狭かった

のであろう。少なくとも有効幅員は、表示幅以下であったと考えられる。これも地租を低くおさえるため、道路の面積を大きめに申告したからだと考えられる。実際、道路面積の割合が4．7%を占めているという数字は、現在の農村と比較してみてもかなり大きな値である。「全誌」に使われている道路の呼称の用例をまとめて、表4に示した。道路の用途、位置に応じて、その呼称が使いわけられていたことがわかる。

河川としては、幅員2間3尺の矢上川と、幅員9尺の根久留美川が北側の村境を流れている。水路は、いずれも4尺以下と細い。主要な水路は4尺であり、2尺の水路が圧倒的に多い。水路は低地、谷底にのみ存在することを考えると、低地部では道路と同じ程度の延長密度を持っているといえよう。土手は3尺から6尺幅で、主に河川、水路にそって設けられていた。



図ー3　道路網

表ー2　線上構造物の延長距離

	幅員	延長距離(間)	割合（%）
道路	3間	43	0．3
	9尺	5118	34．4
	8尺	200	1．3
	7尺	5034	33．9
	6尺	2213	14．9
	5尺	180	1．2
	4尺	2066	13．9
河川	2間3尺	594	
	9尺	349	
水路	4尺	1561	21．2
	3尺	726	9．9
	2尺	5065	68．9
土手	6尺	131	3．9
	5尺	688	20．7
	4尺	367	11．0
	3尺	2141	64．4

表ー3　線上構造物の延長密度と到達距離

	延長距離	延長密度	到達距離
道路	14859間	234.4m/ha	21.33m
水路	7352間	116.0m/ha	43.11m
土手	3327間	52.5m/ha	95.26m

到達距離は、延長密度の逆数に1/2を乗じる

表ー4　道路の種類（8尺以下の道）

種類	用例
作道	田畑の中央を通過する道 山林を通過し宅地から畑へ行く道
野道 原野道	山林を通過する作路以外の道 山林の中央の萱野へアクセスする道 山林と田畑の境界を通る道
枝道	延長距離の短い連絡路や行き止まり道
畑中道	畑の中央を通過する道
墓地道・墓地入道	墓地にアクセスする道
萱野道	萱野にアクセスする道
前道	宅地・神社へ前方からアクセスする道
裏道	宅地の後方から山林にはいる道
山渕道	山林斜面上端の畑との境界にある道
根道	山林斜面下端の田との境界にある道
間道	互いに異なる地目の間の道 互いに異なる小字の間の道
敷道	土手敷の道
添道	土手添の道

「道」の部分を「路」と書かれている用例も多い

４．橋梁と堰の分布と維持管理

村内には６５ヵ所に橋梁が設けられている。３ヵ所の橋梁は、他村との境界の河川にかけられていたため、隣接２～３村が共同で修繕していた。

矢上川に架けられていた五反田橋と高橋は、いずれも長さ３間、幅９尺を有していた。また、五反田橋については旧古より土橋であったが、１８７７（明治１０）年１２月２７日から３１日の間に板橋に修繕したとされている。また、高橋については１８７９（明治１２）年の修繕では神奈川県庁の御指金を使用している。他の６２ヵ所の橋梁は、すべて幅員４尺以下の水路に架けられている。水路に架けられた最大の橋は久末谷入口橋、蓮花寺下橋で、いずれも長さ５尺、幅９尺程度である。キ田橋と呼ばれていた石橋を除いては、すべて土橋か板橋であったと予想できる。主に９尺道に架けられていた１６ヵ所の橋梁は村費を用いて、他の４６ヵ所の橋梁は私費を用いて修繕している。

久末村に関係する堰は、根久留美川に張立てられた山田村、野川村境の堰（名称不明）、後堰、根久留美堰、および矢上川に張立てられた西ヶ崎堰の４ヵ所である。山田村、野川村境の堰から山田村を通過して久末村に用水が流入している。このため、久末村は山田村へ、４畝２６歩の田の収穫を堰水路地代として支払っている。また、堰張立、用水路浚、川刈の費用は田地所有者の反別地価割でまかなっている。同様の費用負担は、後堰、根久留美堰、西ヶ崎堰でも行われていた。西ヶ崎堰は、大堰だと記されており、隣村の子母口村と年番で堰の張立がされている。

５．農村空間構成の特色

「全誌」の表現は、不必要な修辞がなくぶっきらぼうではあるが、それだけに端的で力強い。その表現の中から、筆者石井茂左衛門が執筆時に頭裏にえがいた農村景観が浮かび上がってくるようだ。前節までの結果をふまえつつ、「絵図」を見ながら「全誌」を解釈し、農村空間構成の特色を図４の１２のタイプにまとめた。

谷戸タイプは、谷戸入と谷戸頭を相極とする斜面林に囲まれた集住空間である。これに対し、谷戸田タイプは、田頭と田尻を相極としつつも比較的解放感のある空間構成をとっている。宅地タイプは、前方を田畑、後方を斜面林に囲まれ、周囲を水路や藪で囲まれた孤立荘宅の空間である。墓タイプは、周囲を直接山林に囲まれているため、宅地に比べ簡素な空間を構成している。寺タイプは、宅地タイプと類似しているが、地形的に凸部に位置している点が大きく異なっているし、周囲に墓を有している。神社タイプは、寺タイプを簡素ににした例と言えよう。ジク水タイプとは、「全誌」に「００番林の底土よりジク水し」と記されてた部分が何ヵ所かあるように、谷頭凹部の涌き水を有する空間のことである。萱野タイプは、ジク水タイプ同様山林に囲まれた凹部に位置するが、その多くは台地から萱野へ下ってアプローチする構成が多い。以上のように面的な広がりを持った空間に対し、山渕路タイプと根路タイプは、いずれもエッジが鋭いた線状性の強い空間である。山渕路タイプは斜面林上端の凸型地形、根路タイプは斜面林下端の凹型地形の地性線を生かした道と言えよう。焦点性の強い空間としては三ッ辻タイプと橋タイプがあげられる。三ッ辻タイプは、その角に位置する神仏や掲示によって、道行く人の視線を引きよせる。橋タイプは、「全誌」に頻出した「橋の際」に代表されるように、多方向のアングルから際と呼べる接触面を生み出している。

以上のように、地形占地、土地利用、小規模土木構造物によって、場所のアイデンティティーが豊かな農村空間が構成されていたのである。

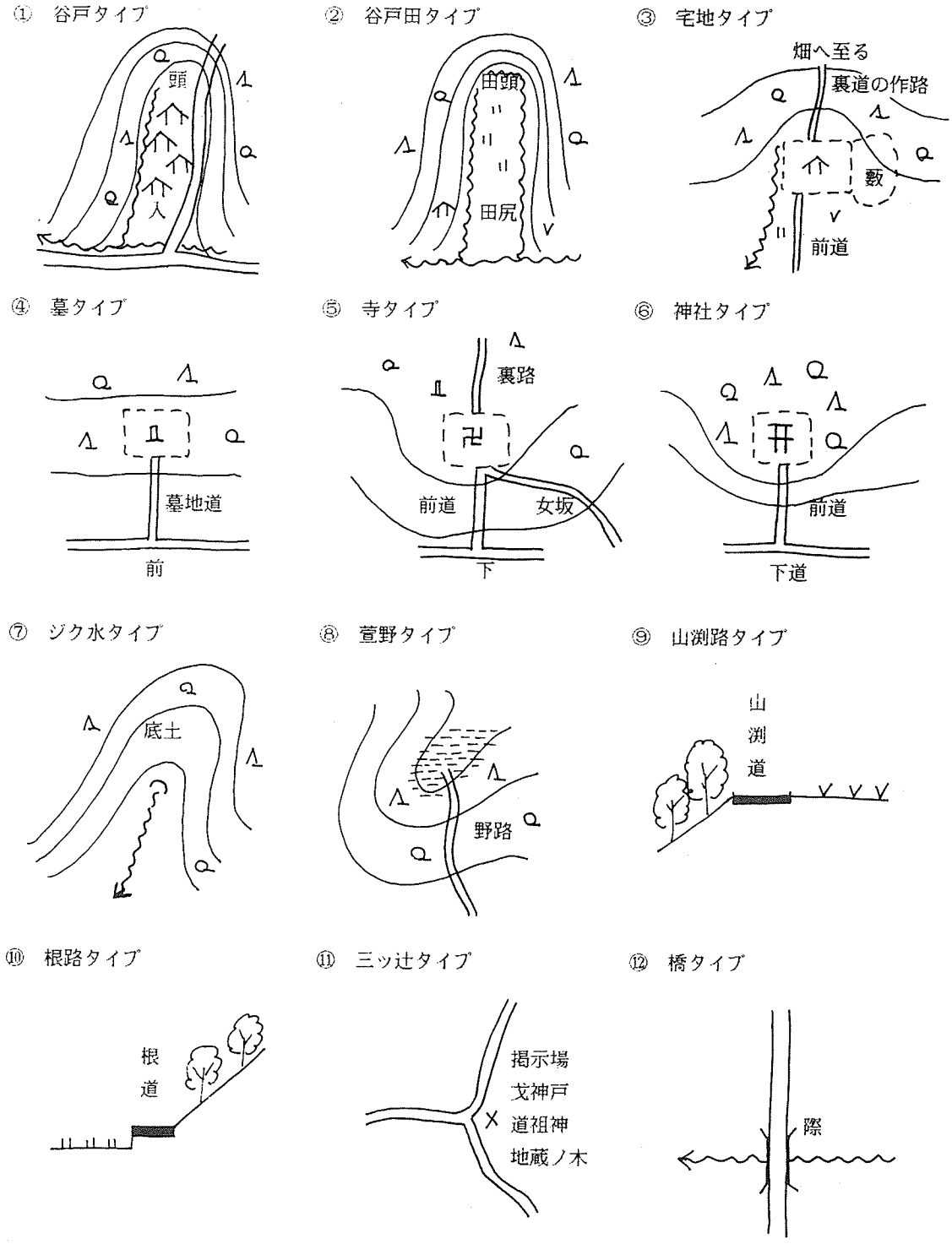

① 谷戸タイプ
頭
② 谷戸田タイプ
田頭
田尻
③ 宅地タイプ
畑へ至る
裏道の作路
敷
前道
④ 墓タイプ
墓地道
前
⑤ 寺タイプ
裏路
前道
女坂
下
⑥ 神社タイプ
前道
下道
⑦ ジク水タイプ
底土
⑧ 萱野タイプ
野路
⑨ 山渕路タイプ
山
渕
道
⑩ 根路タイプ
根
道
⑪ 三ッ辻タイプ
掲示場
戈神戸
道祖神
地蔵ノ木
⑫ 橋タイプ
際

図4　空間構成タイプ

６．おわりに

久末の取材調査のなかで、「昔　チョウチョウ水と呼ばれる涌水が出ていて、小さい頃はそのまわりでよく遊んだものです。」とか、「桜道と呼ぶこの道には、昔その名のとうり桜並木が続いており、道路沿いの水路でよく水遊びをしたものです。」と聞いた。それは物質的にまずしい時代のことだったかもしれないが、細やかな日本の田園風景に織りこまれたリアルな体験だったはずだ。現在の久末は、スプロール化の波にあらわれ、台地、低地はもとより、斜面にまでも住宅が進出し、昔の清水はみる影もない。市街化が進む進まないにかかわらず、小谷の廃田に雑草がおいしげり、斜面林は蔦と篠笹で荒れるにまかせ、濁水がドブを流れているのが現在の日本の多くの農村の姿であろう。今、どれだけの日本人が、４尺の道に、２尺の水路に、３尺の土手に、１坪に満たない橋に、９尺の堰に、豊かなまなざしを向けているのであろうか。

謝辞

本研究を進めるにあたって文書をみせてくださった石井章司氏、その他調査を支援してくださった森増五郎氏、森勝治氏、池田正順氏、日本地名研究所、川崎地名研究会の皆様に感謝いたします。

引用文献，および注

１）　木村礎，「村の語るに本の歴史　近世編１」，そしえて，ｐ１４０，１９８３．

２）　同上，ｐ１４８．

３）　明治１０年から１２年にかけての記述があるから、明治９年の初筆に書き加えて写筆した文書と考えられる。

参考文献

笹谷康之，中村良夫，農村集落の民俗空間構成に関する研究，造園雑誌，Vol.48，No.5，1985.